

# 大井ダムと恵那峡の歴史



岐阜県恵那市

## ★はじめに

二〇一五年九月二十八日から二〇一六年九月三十日まで、私は電気新聞にて「風のゆくえ」を連載しました。そして二〇一七年三月、中央公論新社から「水燃えて火」と改題、加筆と訂正を加えて出版しました。

最初に連載したのが文字通り電気業界の業界紙だったので、テーマを明治の末に電力事業に関わりを持ち、やがて大正時代には電力王と評された福沢桃介を中心に物語を書こうと思い立ちました。そして取材を重ねたのですが、取材を重ねるごとに色々な側面を知り、私は瞬く間に、はまり込んでしまいました。そして物語のプロローグは、現代の、この恵那峡と大井ダムにしようと思いましたが、それは、この恵那市にある大井ダム、そのダム湖でもある恵那峡を見ていると、経済と自然の営みの両方を見るようで、まさに現代の日本のありよう、そして世界のありようを考えさせるように思ったからです。恵那市には凄いモノがある！もったいない！と思ったのです。それを恵那峡を訪れた方にはぜひとも感じて欲しいと思いました。

今回、本書を作るにあたり、出版した「水燃えて火」ではなく、「風のゆくえ」の記述を交えながら、皆さまに少しでも恵那の魅力を知っていただければと思います。

## ★「水燃えて火」の主な登場人物

・福沢桃介（一八六八—一九三八）

埼玉県出身で岩崎家に生まれるが、神童と言われ、福沢諭吉が興した慶應義塾大学に進学する。やがて福沢諭吉の次女と結婚して婿養子になり、以来、福沢桃介となる。主に電力開発を手がけ、大同電力や名古屋電灯の社長を務めた。木曾川には三十三カ所の水力発電所があるが、大正時代に桃介は木曾川に七カ所の水力発電所を作った。



・川上貞奴（一八七一—一九四六）

芸妓から日本初の女優になった彼女は、芸妓時代、書生芝居をしていた川上音二郎と知り合い、結婚。桃介とは幼い頃出会っているが、音二郎亡き後、桃介のビジネスパートナーとして、大井ダムの建設にも密接に関係している。



・川上音二郎（一八六四—一九二一）

福岡の出身で、オツペケペー節で一世を風靡した。歌舞伎（旧劇）に対し、今日の新派を作った。貧者救済と寄付をしたり選挙に出たり（二回とも落選）、海外公演をしたり、色々なことを手がけ、興行師として一世を風靡するものの、四十七歳で他界する。

・島崎広助（一八六一—一九二八）

文豪、島崎藤村の実兄。御料林問題など紛争解決に奔走して、大同電力の福沢桃介とも交渉を重ねている。

そのほかにもたくさん登場人物がいますが、誰かを悪者にするのは私があまり好まないのも、もちろんアウトラインは実際の資料を駆使して輪郭を作りましたが、基本的にはあくまでも小説です。私の想像や思い入れもあるかと思いますがお許し下さい。

表紙絵：木曾川沿いの7つの発電所の窓

# 桃介の水力発電の集大成”大井ダム“

## ★当時の電力開発に関して

電気の概念は大昔からあったのですが、なかなか庶民の暮らしの中には広まりませんでした。けれども、エジソンが一八七九年（明治十二年）に「白熱電球」を発明したことから変わりました。

それから僅か四年後の一八八三年（明治十六年）、鹿鳴館開館の年には、東京電灯ができました。ここから世の中は一気に「電気時代」に入ります。一八八九年（明治二十二年）には、僅か五社だった電力会社も、七年後の一八九六年（明治二十九年）には三十三社。一九〇七年（明治四十年）には百十六社、一九一二年（大正元年）には三百二十七社。なんと、エジソンから三十年あまりで、日本の電力会社は三百倍を越えたということになります。

この時代は、文明開化の時代です。西洋文明が日本に入り、近代化、西欧化が大きく進んだ時期でもあります。一八七一年（明治四年）には断髪・断刀令が發布されましたし、食べ物も西洋化、つまり肉を食べる

とか、牛乳を飲むとか、あんパンの発明も一八七四年（明治七年）の頃です。教育や医療、芝居なども変わりました。

それゆえ拙著において、電力とは関係なく、貞奴や音二郎に関しての記述が多くなったのは、芝居がどう変わったのか……ということをおみなさんに披露したかったのです。

それまで客は、芝居を鑑賞しながら飲み、食べるのが通例だったし、そのため上演時間も長かったのですが、今のように客席での飲食は禁止、上演時間も短くなったのはその頃です。変えるというのは大変な労力が必要となります。ちよつと考えても売店の閉鎖や案内人、お運びさんなどが解雇になること、劇場の建物の変化など、大きな変革が訪れるのです。

その他にも、建築の分野でも西洋建築が入ってきましたし、鉄道も蒸気機関車などが大きく普及した時代です。時代の変わり目だったということ。それは電気にも言えるでしょう。時代は刻々と変わります。それが

よいか悪いかはともかく、毎日変わっていくのです。方丈記の冒頭で鴨長明はこう書いています。

「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまるためしなし」と。

私たちは留まっているように思いますが、色んなところが変わっているでしょう。ただ水の流れば変わらないのです。

変わるためには変わらないうことを死守していないといけないのだとしみじみ思います。



## ★福沢桃介の電力開発について

【鉢盛山を水源とする木曾川には三十三ヶ所もの水力発電所がある。その中の七ヶ所が、福沢諭吉の娘婿である福沢桃介によって作られた大正時代の発電所である。大井ダムを持つ大井発電所もその一つだが、桃

介が手がけた発電所には特色がある。七ヶ所のうち四ヶ所が近代化産業遺産に認定されていて、その四ヶ所のうちの二つ、読書発電所は国の

重要文化財にもなっているのである。どの発電所を見てもそれは単なる無機質な発電所の建屋ではなく、建物のあちらこちらに意匠やデザインが施されている。その昔、

桃介が木曾川水系の開発に乗り出したとき、彼は発電所をライン川に浮かぶ古城のように並べたいと言っていた。ようだが、あきらかに桃介が手がけた発電所とその他のものでは雰囲気（風のゆくえ）より、



読書発電所（重要文化財）  
1923年竣工

木曾川は大井ダムができるまで材木を流していました。木曾川にはそれまでも多くの発電所がありました。水をしき止める、いわゆる「ダ

ム」を擁する発電所はありませんでした。すべてが水路式だったので、上流の山々から伐採される材木を、名古屋まで流す「木流し」が行なわれていたのです。管流しや筏流しなど、材木を流す方法は川の流れの速さや川幅によって色々ありました。もちろん上流は川も急峻でしたが、木曾川も下流に近づくにつれ、揖斐川、長良川などと合流し、川幅も広くなってきました。まだ水力発電のタービンも、ましてやダムを造る技師や会社など日本にはない時代でしたが、大規模な「電気」を求める時代になり、木曾川にすでにいくつも発電所を作っている福沢桃介もその意欲を実現させる時と思っていました。

#### ・技術は一つではない

技術は一つではなかなか世の中は変えられません。発電しても近隣にしか送れなかった時代は、工場に隣接して火力発電所を作るという形が主でした。そのため、人里離れた川縁や市街地からあまり離れていては発電所の意味がないと思われています。

した。一般家庭で電気を使うということはその頃はほとんどなかったからです。

けれども、だんだんに電気の需要が高まってきた時に、「高圧」で「大容量」の電気を送れる、「送電方法」の技術が確立したのです。そのため川の畔に大型の発電所を作っても、それを都市部まで送れるようになりました。いよいよ「ダム」を要した大型の発電所の可能性がでてきたのです。けれどもダムを造ってしまったら、材木を木曾川に流すことはできなくなりそうです。川の利用をどうするか。伝統と、千載一遇の技術革新との間で桃介は大きく悩み、その方策を考える日々でした。ダム建設に反対の島崎広助と対峙したのもこの頃です。そしてダムを造っても、今後を考え、鉄道や道路の完備など木曾の人々や木流しをする人たちに配慮したダムの造り方を編み出します。大変長い時間をかけました。

#### ・電気を使う！

それまで「電化」された暮らしをしていなかった人々に、電気を使つた暮らしの快適さを知らしめること、そして電化製品を増やすことは大切です。今なら黙っていても色々なアイデアが生まれたでしょうが、いったい電気とはなんぞや？と思つている人にとっては、目に見えること、こういう使い方ができるのだという現物が必要です。

そのことを福沢桃介は痛いほど感じていました。ですから船屋で、すし飯を冷やすために扇風機とか、料亭の座敷に扇風機とか、こまめに売り込みをしたそうです。

#### ・外国人に学び、日本式に作る

前にも書いたように、まだ水力発電のタービンも満足に作れなかった時代なので、どうしても外国から技師を呼ばなければなりませんし、発電所の設計も外国人技師に教えを乞わなければなりません。発電所は川縁にあるので市街地の高級旅館からはとても通いきれません。そのた

め、桃介はバスルームや洋式便所も設えた、大洞荘という、招聘した外国人たちを泊め、会議ができるような宿泊施設を作り、もてなしをきちんとできるようにと貞奴を招きました。それが南木曾町にある「大洞荘」、現在は「桃介記念館」です。それだけ知識を得るために外国人を手篤くもてなしたのですが、決して外国人のいいなりになつたわけではありませんでした。そのさじ加減はたいしたものだと思えます。



#### ・「電気」の見せ方にこだわった桃介

たとえば桃介は、電気の見え方をとても考えました。木曾川に並ぶ七つの発電所は、どれも中山道、あるいは中央線から見える位置に建てました。そして発電所の建築は、どれもネオゴシックとか、赤煉瓦とか丸屋根とか目を引く建造物でしたし、発電所

には、現在では考えられませんが窓もふんだんに作りました。その窓も考え抜かれたデザインでした。

それはつまり人が見たとき、歩いていても、車に乗っていても、列車で走っていても、そこが「電気」を作る発電所であるということをはっきりさせるためだったのです。そして夜、窓から漏れる明かりで「電気」がそこにあることを分からせるためでもあったのです。



このような仕掛けは、名古屋にある拠点、「二葉居」いまは「二葉館」に、残されているものもあります。自家発電装置は今もあります。また移築をしたため庭を潰したので再現はできなかつたのですが、建築当初はガーデンパーティーをする時に庭を照らすサーチライトもありました。

言ってみれば「電気」のある暮らしを具現して見せていたとも言えるで

しょう。

また、桃介は恩義を忘れることのない人で、恩人の銅像やレリーフ、そして資材を運ぶため

に木曾川に架けた橋にはきちんとすべて恩人の名前をつけました。賤母発電所には「對鶴橋」、大桑発電所には「下出橋」、須原発電所には「満寿太橋」、桃山発電所には「栄橋」、読書発電所には「三根橋」、落合発電所には「村瀬橋」、大洞荘に向かう橋には「桃の橋」、後に「桃介橋」と改名しましたが、必ず誰かの名前をつけました。

また各発電所には竣工に至るまでの経緯を細かく記した紀功碑や関係者のレリーフを設置、また水槽扁額にも、賤母は西園寺公望、大桑はフランス首相のクレマンソー、桃山は無線通信の発明者マルコーニ、読書は山県有朋、大井は福沢諭吉、落合はエジソンと、どれも重鎮からの字



を刻んでいます。本当にどれも今の発電所とは一線を画すような佇まいなのです。

だからこそ、桃介の手がけた発電所のうち、四つが近代化産業遺産、そのうち読書発電所は文化遺産にまなつているのかもしれない。建造物としても木曾川の福沢桃介の手による発電所を見るのは面白いと思います。



【紀功碑の表には、この大井発電所やダムがどのような労苦の末に完成したか、その経緯が細かく碑文として記されている。そして裏側には、建設に携わった企業や人物の銘板がはめ込まれていた。

「ここに彫られている人たちが、このダムとかを作った人たち？」  
「ああ、そうだね。社長とか副社長とか、アメリカのお金を貸してくれた人とか、いろんな人が紹介され

てる。水車とか発電機とか配電盤とか、そういう機械を作った会社の名前もあるな」

孝一は興味深げに銘板を眺めている。

「ねえ、お父さんもダムとか水力発電所とか作る仕事でしょ？ お父さんが偉くなったらさあ、作ったものには、こういうふうにお父さんの名前とか顔とか彫ってもらえる？」

村瀬は苦笑した。裝飾や意匠のみならず、こんな紀功碑も現代では考えられないものだ。電気というものが、この百年ほどの間にどれだけ特別ではなく身近なものになったのか、発電所の有り様を見ているだけでよく分かる。

「お父さんも頑張ってこういうところに顔が彫られるようになったら、お母さんも喜ぶよ」

村瀬は腕組みをしたまま何も言わず、銘板を見つめながら、蝉時雨の中でぼんやりとしていた。【

「風のゆくえ」より】

## ・大井ダム建設

福沢桃介が手がけた最後の大仕事が大井ダムの建設でした。大井発電所はダムを造ることもあり、かなりの時間を費やしましたが、ずっと右肩上がりです。電力消費が増え続けていたので、住んでいる人々や国、桃介の木曾川開発にも拍車がかかりました。そしてようやく大井ダムの着工となり、工事が始まりました。桃山発電所、読書発電所、そして大井ダムを擁した大井発電所など、工事は目白押しでした。その最中一九二三年（大正十二年）の九月一日、関東大震災が起こります。完成直前だった桃山発電所と読書発電所は、なんとか完成しましたが、木曾川をせき止めてダムを造るといふ大工事をしている大井ダムは、建設中に大洪水があり、死者まで出すという大事故にも見舞われていて、難工事が続い



ていました。そのため資金も、電力消費もびたりと止ってしまい、先が見通せなくなってしまう、大同電力の息の根が止るかと思われました。万事休すかと思っているときに桃介の決断でアメリカに向かい、アメリカから資金を調達するという策に出ます。未曾有の自然災害を危ぶむ機運はアメリカ社会にもあり、日本もこの時期にアメリカから資金調達するということが反対する勢力もあつたため、博打のようなものですが、何とか資金を獲得し、大井ダムは完成します。

桃介がアメリカに資金調達をしている間、貞奴は彼の不在をきつちりと守りました。大井ダム建設のために泊まり込んでいる技師たちをもてなしたり、そこに詰めている水力発電の責任者に、稼働している発電所の様子を聞いたり、ダム工事に携わっている者を現場に赴いて励ましたり、運転間もない読書発電所の様子を見たり、真つ赤なバイクに乗って八面六臂の活動をしたと言われています。

## ・大井ダムの特徴

【大井ダムは、洪水吐と呼ばれるダムから水を放流するときのゲートが二十一基並んでいる。これも壮観なのだが天端を歩くと、ダムの堤頂部に設置されているその二十一のゲートの反対側に、対応するように台座に乗った照明灯が並んでいる。

その六角形のランプシェードも、台座も手すりも、大正時代の香りをそのまま残しているのだ。建物の意匠も天端のありようも、現代なら無駄なものとして真つ先に予算から削られるものだろうが、ただ金に飽かして作ったというのではなく、そこにはこれは単に電気を作る設備、水をせき止める設備なのではない、と胸を張る桃介の意地というか気概が滲む。土木畑を歩き続けてきた村瀬には、それが羨ましくもあり、また時代の変遷を感じさせる遺跡のように



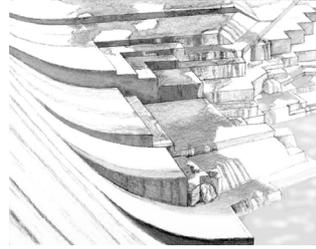
も思えた。しかしその遺跡もまだ現役で働いているのだ。村瀬がいつも古い水力発電所を見る度に考えさせられるのは、古き、新しさではなく、何が残って何が消えていくのかは別のことなのだということだった。】  
（「風のゆくえ」より）

【大井ダムはその天端を歩くことができる。天端というのは堤防やダムの最も高いところのことである。黒部ダムでは、その天端は観光ルートになっているし、長野にある奈川渡ダムの天端は国道百五十八線となっていて車で通行することができ。片側にダム湖、もう片側にはダムという両方の景色を愛でられる天端は、見る者に、異なる世界を同時に見せる不思議な道だ。大井ダムは、そのダム堤防の本体である「堤体」の姿が面白い。ダム湖から一気に落ちる水の勢いが大きいと、川の底を必要以上に削ったり、川岸に当たって浸食したり、次第にそこを傷めてしまう。それを避けるため、落ちる水の力を減衰させる手立

この工法を「減勢工」というのだが、ここでは中央部を除く左右にそれが施されている。川面近くには不均等な段々があちらこちらにあるのだ。見る者にはそれがデザインのように映る。」

(「風のゆくえ」より)

とにかく恵那の素晴らしさを感じて欲しいのです。オレンジ色と白がマープルのようになっていいる「減勢工」も、ダムから放流するゲートも、ランプも台座も手すりも、すべてを。桃介の電力開発の総決算が大井ダムを見ると分かれると思ふからです。自然を守るといふ大前提をいかに具現したかが窺えると思います。



### ★恵那峡

恵那峡はその昔は「恵那溪」と呼ばれていました。その頃はもちろん大井ダムが建設されていませんから、急峻な木曾川のせいで奇岩石が多く、その頃は観光客が川下りで冒險を楽しむ姿もあったようです。けれども大井ダムが着工される前の、一九二〇年(大正九年)に地理学者の志賀重昂氏がここを訪れ「恵那峡」と命名しました。

日本各地にはダムができることによつて景観が損なわれたケースが多いのですが、この恵那峡は、見事に自然とダムとが融合し、いまでも恵那峡は県の自然公園の中心的存在として確固たる地位を保っています。

【恵那峡は、木曾川の水力発電開発の祖でもある福沢桃介が、大正十三年に、日本初のダム式発電所「大井発電所」を作ったときの「ダム湖」である。奇岩石が多く、急流で暴れ川だった木曾川のこのあたりを、穏やかで風光明媚な風景に変え、「恵那峡」という名称まで勝ち得たの

は、発電所とダムのおかげだった。ダムやら発電所は、たいていは嫌われ者だが、このあたりでは名勝を作ったものとして尊ばれている。】

(「風のゆくえ」より)

### ★おわりに

福沢桃介のことを一年間連載するため、何回も取材しました。もちろん電力の流れが中心ですが、木曾川の歴史、演劇の歴史、ひいては中山道や中央線のこと……です。たいていは車で回りましたが、取材先は長野県、岐阜県、愛知県、三重県にまたがりました。

そして今、思ったことは時代が揺れ動く時期だったのだなあ、ということ。今もそうかもしれない。私たちは、何かそこから学べる何かと思っています。

大井ダムの天端から恵那峡と、そして大井ダムの減勢工を見ていると、さまざまなことを考えます。演劇の変遷、エネルギーの変遷、伝統の変遷……。などなど。

人間の生きている期間は百年ほど

です。その間には、変化も必ずあります。取り返しのない変化を選ばず、けれども変化を恐れず、何かを守りながら、何かを変化させる。そういう選択をするのは小さな人間に与えられた大きな命題です。それを恵那峡は教えてくれました。

だから何か悩んだとき、私は必ず大井ダムの天端に行きます。そして二つの景色を見ます。そして最後には何かヒントをもらつて、そこを後にするので。

そして、私にはそういう場所があること、とても幸せだと思つています。



【著者】

神津カンナ（こうづかんな）



作曲家の神津善行、俳優の中村メイコの長女として東京に生まれる。東洋英和女学院高等部卒業後、ニューヨークのサラ・ローレンスカレッジで演劇を専攻。

帰国後第一作の『親離れするとき読む本』は、体験的家族論として注目され、ベストセラーとなる。以後、執筆活動の他、テレビ・ラジオ出演、講演、公的機関や民間団体の審議委員等で精力的に活動。本書は、福沢桃介と木曾川水力発電を題材にした小説「水燃えて火」山師と女優の電力革命（中央公論新社二〇一七）（原題「風のゆくえ」）の記述を交えて執筆。



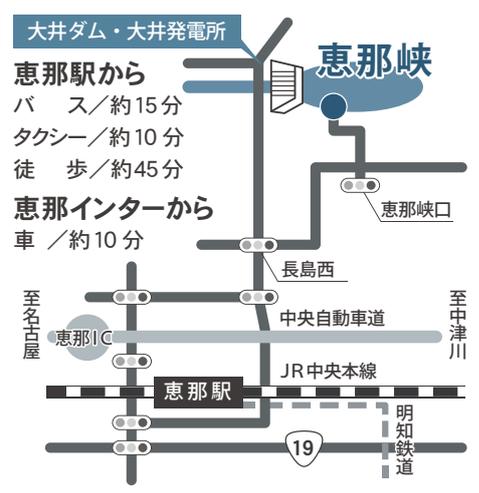
### ◆大井ダムとシクラメン

高品質なシクラメンとして  
評価の高い恵那市のシクラメン

恵那市を代表する花「シクラメン」の国内での本格的な生産は、大井ダム建設が契機となつて始まりました。大正時代、東野の農家の伊藤孝重氏が、ダム建設に関わるアメリカ人技師の妻から提案を受けてシクラメン生産を開始。その後、同じく東野で切花を作っていた千藤恩三氏も加わり生産量を拡大しました。昭和四十年代後半には、生産者たちが「恵那花き研究会」を設立し、現在も技術を磨き続けています。



### 恵那峡へのアクセス



### 【奥付】

書名…大井ダムと恵那峡の歴史  
著者…神津カンナ  
編集・発行者…岐阜県恵那市  
〒五〇九七二一九二  
岐阜県恵那市長島町  
正家一丁目一番地一  
TEL〇五七三二六二二二

発行日…令和七年三月  
参考資料…水燃えて火  
―山師と女優の電力革命―  
（中央公論新社二〇一七）  
（原題「風のゆくえ」）

表紙絵・挿絵提供  
…川崎麻児

画像提供…藤下茂夫 成田山貞照寺  
協力…関西電力株式会社東海支社  
印刷・製本…有限会社アド・ループ

このガイドブックは、令和六年度に「岐阜県清流の国ぎふ推進補助金」を受けて作成しています。